

メッセージアウトライン サムエル記第一9:1～10:27

「主に選ばれたサウル」

<9章>

[1]「ベニヤミン人で、その名をキシユという人がいた。キシユはアビエルの子で、アビエルはツェロルの子、ツェロルはベコラテの子、ベコラテはベニヤミン人アフィアハの子であった。彼は有力者であった」

この系図には省略があると思われる。I 歴代誌8:33, 9:39では「ネルはキシユを生み」とあり、アビエルはI 歴代誌9:35では「ギブオンの父エイエル」と記されている。それゆえ、…アビエル(エイエル)→ネル→キシユという順であろう。なおこの場合の「ギブオンの父」とは「ギブオンの開拓者」を意味する。

[2]「キシユにはひとりの息子がいて、その名をサウルといった。彼は美しい若者で、イスラエル人の中で彼より美しい若者はいなかった。彼は民のだれよりも、肩から上だけ高かった」

「サウル」…求められた者の意。「美しい」…「良い」という意味で美貌以上のものを含む。

「若者」…「選りすぐられた者」の意で生命の盛りを示す。「民のだれよりも肩から上だけ高かった」…彼の背の高さと強さを強調した表現。

[3]「あるとき、サウルの父キシユの雌ろば数頭がいなくなったので、キシユは息子サウルに言った。『しもべを一人連れて、雌ろばを捜しに行ってくれ。』」

「雌ろば」は旅行などにも使われる裕福な農民の乗り物であり、大切な財産であった。

[4-5] サウルとしもべは父の頼みで雌ろばを捜しに出発した。ギブア(エルサレムの北約5キロメートルの地)→エフライムの山地(ギブアから北西方向)→シャリシャの地(ギルガルの北西と思われる。場所不明)→シャアリムの地(場所不明)→ベニヤミン人の地(ベニヤミン部族の居住する地)→ツフの地(サムエルの住んでいたラマの近くの地と思われる)しかし、雌ろばは見つからず、サウルは父が心配するので帰ろうとした。すでに三日たっていた(20節)

[6-10]「すると、しもべは言った。『ご覧ください。この町には神の人がいます。この人は敬われている人です。この人の言うことはみな、必ず実現します。今そこへ参りましょう。私たちが行く道を教えてくれるかもしれません。』サウルはしもべに言った。『もし行くとすると、その人に何を持っていこうか。私たちの袋には、パンもなくなったし、神の人に持っていく贈り物もない。何かあるか。』しもべは再びサウルに答えた。『ご覧ください。私の手に四分の一シェケルの銀があります。これを神の人に

差し上げたら、私たちの行く道を教えてくださるでしょう。』昔イスラエルでは、神のみこころを求めに行く人は『さあ、予見者のところ行こう』とよく言っていた。今の預言者は、昔は予見者と呼ばれていたからである。サウルはしもべに言った。『それは良い。さあ、行こう。』こうして、彼らは神の人のいる町へ行った。今の預言者は、昔は予見者と呼ばれていたからである」

ここでサウルのしもべはこの町にいる神の人に、いなくなった雌ろばのことで教えを請うことをサウルに提案する。「一シェケル」は11.4グラムであり、四分の一シェケルは2.85グラムとなる。彼らはこの量の銀を神の人への贈り物とした。

「予見者」…神からのことばを受ける者。「預言者」…それを民に宣告する者。実際は同一である。

[11-13]「彼らがその町への坂道を上って行くと、水を汲みに出て来た娘たちに出会った。彼らは『予見者はここにおられますか』と尋ねた。すると娘たちは答えて言った。『はい。この先におられます。さあ、急いでください。今日、町に来られました。今日、高き所で民のためにいけにえをお献げになりますから。町に入ると、あの方が見つかるでしょう。……』」

水を汲みに出て来た娘たちは神の人のことを丁寧に説明した。この町で神の人のことを知らない人はいなかったのであろう。「高き所」…いけにえを献げる祭壇が築かれた場所。

[14]「彼らが町へ上って行き、町に入りかかったとき、ちょうどサムエルが、高き所に上ろうとして彼らの方に向かって出て来た」

今まで話題になっていたこの町の予見者とは何と、かの有名なサムエルではないか。今までサムエルの名前が出なかったのはサムエル記の記者の巧みな文学的的技巧と言わねばならない。

[15-17]「主はサウルが来る前の日に、サムエルの耳を開いて告げておられた。『明日の今ごろ、わたしはある人をベニヤミンの地からあなたのところに遣わす。あなたはその人に油を注ぎ、わたしの民イスラエルの君主とせよ。彼はわたしの民をペリシテ人の手から救う。民の叫びがわたしに届き、わたしが自分の民に目を留めたからだ。』サムエルがサウルを見るやいなや、主は彼に告げられた。『さあ、わたしがあなたに話した者だ。この者がわたしの民を支配するのだ。』」

16節では「わたしの民」と三回も繰り返されている。この表現から、主はイスラエルの民が間違った道に行っても決して見捨ててはおられないことを知らされる。イスラエルはご自分の民なのである。主はサムエルが相手を決して間違えないように、サウルが現れるやいなや、「わたしがあなたに話した者だ」と教えられた。

主は、はかりしれないみこころによってイスラエルの民に王を立てることを認められたのである。

[18-21]「サウルは、門の中でサムエルに近づいて言った。『予見者の家はどこです

か。教えてください。』サムエルはサウルに答えた。『わたしが予見者です。私より先に高き所に上りなさい。今日、あなたがたは私と一緒に食事をするのです。明日の朝、私があなたを送ります。あなたの心にあるすべてのことについて、話しましょう。三日前にいなくなったあなたの雌ろばについては、もう気にかけないようにしてください。見つかっていますから。全イスラエルの思いは、だれに向けられているのでしょうか。あなたと、あなたの父の全家にはありませんか。』サウルは答えて言った。『私はベニヤミン人で、イスラエルの最も小さい部族の出ではありませんか。わたしの家族は、ベニヤミンの部族のどの家族よりも、取るに足りないものではありませんか。どうしてこのようなことを私に言われるのですか。』

ここではサウルとサムエルの会話が記されている。①サウルとしもべはサムエルと高き所で食事をする。②サウルの心にあるすべてについて話す。③三日前にいなくなった雌ろばはもう見つかっているので気にしないように。④全イスラエルの思い(誰がイスラエルの王となるのか)はサウルとサウルの父の全家に向けられている。⑤サウルは、自分はイスラエルの最も小さいベニヤミン部族の出で、自分の家族はその中でどの家族よりも取るに足りないもので、そのような自分にどうしてこのようなことを言われるのかと謙遜する。

確かにベニヤミン部族は士師記19～21章に記されているようにレビ人を襲い、その側女を集団で暴行して殺してしまうという忌まわしい事件により、他のすべての部族が集まって彼らと戦い、ベニヤミン部族は戦いに負け、消滅の寸前まで人数が減ってしまい、小部族になっていた。

[22-25] サムエルはサウルとそのしもべを招いて上座に座らせ、最上の食事をさせた。「もも肉」は本来祭司だけが食することのできる部分であった。→レビ記7:32~33 その後、サムエルはサウルと泊まる家の屋上で話をした。

[26-27] 翌朝早くサムエルは屋上にいるサウルを呼び起こし、彼を送り出すが、しもべだけを先に行かせ、神のことばを聞かせようとする。

この章において教えられることはサウルは背が高く美男子であったという以外は謙遜で常識的な人物であり、何の野心も将来の計画も持たない普通の人であり、しかもベニヤミン部族は他の部族からさばかれ、小部族となっていたということである。

<10章>

[1]「サムエルは油の壺を取ってサウルの頭に注ぎ、彼に口づけして言った。『主が、ご自分のゆずりの地と民を治める君主とするため、あなたに油を注がれたのではありませんか。』」

油を注がれるのは預言者、祭司、王として立てられる時。→出40:13~15、士師9:8, 15、I列19:16 しかし、サムエルはここで故意に「王」という名を用いず「君主」とする。今までのいきさつからこだわりがあるのだろうか。

[2-8] ここからはサウルに対するサムエルの預言が述べられていく。

①(2) 今日、サムエルのもとを離れて行くとき、ベニヤミンの領内のツェルツァフにあるラケルの墓のそばで、二人の人に会う。彼らはサウルに雌ろばは見つかったこと、彼の父はそれより彼のことを心配していることを伝える。「ツェルツァフ」…エルサレムの北西3キロメートルにある町。「ラケル」…イスラエル(ヤコブ)の最愛の妻でヨセフとベニヤミンの母。

②(3~4) タボルの櫂の木のところでは三人の人に会う。彼らはサウルにあいさつをし、それぞれ子やぎ三匹、円型パン三つ、ぶどう酒の皮袋一つを持っており、パンを二つくれるので受け取る。サウルとしもべの分であろう。「タボル」…場所不明。

③(5~7) ペリシテ人の守備隊がいるギブア・エロヒム(神の丘の意)の町に入るとき、琴、タンバリン、笛、豎琴を鳴らし、預言をしながら高き所から下って来る預言者の一団に出会う。

主の霊がサウルの上に激しく下り、彼らと一緒に預言して新しい人に変えられる。この場合の預言とは楽器をもって神を賛美しながら示されたことばを語る。→ 出15:20~2、Ⅱ列王3:15、Ⅰ歴代25:3 これらのしるしが起こったら、神があなたとともにおられるので、自分の力でできることをしなさい。

④(8) サムエルより先にギルガルへ行き、そこでサムエルが全焼のささげ物と交わりのいけにえを献げるために下ってくるまで七日間待つこと。

[9] 神はサウルに新しい心を与えられ、それらすべてのしるしは、その日のうちに起こった。

[10-12]「彼らがそこからギブアに行くと、見よ。預言者の一団が彼の方へやって来た。すると、神の霊が彼の上に激しく下り、彼も彼らの間で預言した。以前からサウルを知っている人たちはみな、彼が預言者たちと一緒に預言しているのを見た。民は互いに言った。『キシユの息子は、いったいどうしたことか。サウルも預言者の一人なのか。』そこにいた一人も、これに応じて、『彼らの父はだれだろう』と言った。こういうわけで、『サウルも預言者の一人なのか』ということが、語りぐさになった」

サムエルのことばどおり、ギブアでサウルは預言者の一団とともに預言をし始めた。サウルは預言者ではないのにサウルは預言している。それで「彼らの父はだれだろう」という驚きのことばが発せられたのである。

「サウルも預言者の一人なのか」とは従来の人物からは予想しがたい別の性格が現れたことへの驚きを示すことば。

[13]「サウルは預言を終えて、高き所に帰って来た」

高き所に行ったのは礼拝をするためであったろう。

[14-16] サウルはおじに出会い、どこに行っていたのかと問われ、雌ろばを捜しにサムエルのところへ行って来たと言われ、サムエルは雌ろばは見つかっていると知らせてくれたと答えた。しかし、王位のことについては話さなかった。自分のような者

がとの謙遜と恐れがあったであろう。

[17-27]サウルの王としての選出の次第

[17-18]サムエルはミツパで、民を主のもとに呼び集め、主のことばを聞かせた。「ミツパ」…ギブアから北に約9キロメートルの地と思われる。

「…あなたがたをエジプトの手と……すべての王国の手から救い出したのは、この私だ」主なる神は出エジプト以来のイスラエルに対する救いのみわざを思い起こさせ「救い出したのは、この私だ」と強調される。主なる神の守りと導きと力あるみわざがなかったならばイスラエルは今日のように一国として存在していなかったであろう。

[19]「しかし、あなたがたは今日、すべてのわざわいと苦しみからあなたがたを救ってくださる、あなたがたの神を退けて、『いや、私たちの上に王を立ててください』と言った」

サムエルのこの言い方は民をさばいていることを示している。もともと彼は民の意見には賛成していなかったのである。

「今、部族ごと、分団ごとに、主の前に出なさい」民への苦言に続いていよいよ王選出の手続きがなされる。それは、くじによるものであった。

[20-21] まずイスラエル全部族の中からベニヤミン部族が取り分けられた。そしてその中でマテリの氏族が取り分けられた。そして、キシユの息子サウルが取り分けられた。それで人々は彼を捜したが見つからなかった。

[22-23] 人々の問いに、主は「見よ、彼は荷物の間に隠れている」と言われた。恐れがあったのであろう。それで彼らは走って行って、そこからサウルを連れて来た。彼は民のだれよりも、肩から上だけ高かった。

[24-25]「サムエルは民全体に言った。『主がお選びになったこの人を見なさい。民全体のうちに、彼のような者はいない。』民はみな、大声で叫んで、『王様万歳』と言った。サムエルは民に王権の定めについて語り、それを文書に記して主の前に納めた。それから、サムエルは民をみな、それぞれ自分の家に帰した」

「王権の定め」とは王が暴走しないための歯止めの規定である。→申命記17:14～20

[26-27]「サウルもギブアの自分の家に帰って行った。神に心を動かされた勇者たちは、彼について行った。しかし、よこしまな者たちは、『こいつがどうしてわれわれを救えるのか』と言って軽蔑し、彼に贈り物を持って来なかった。しかし、彼は黙っていた」

王が選ばれる時には尊敬と批判の両方の反応が現れるのは世の常である。しかし、軽蔑されても黙っていたというふるまいに、彼の人格の高潔さが現れている。主は「彼らは…わたしが王として彼らを治めることを拒んだ」(8:7)と言われたが、彼らの頑なさのゆえにサムエルに「彼らの言うことを聞き、彼らのために王を立てよ」

(8:22)と言われた。そのようにして、いよいよ王がイスラエルに立てられたのである。頑なで聞き分けのないイスラエルの民であるが、それでも彼らはアブラハム以来の主の民なのである。主はそのような彼らを決して見捨ててしまわずに、摂理のうちに導き続けてくださるのである。

そして、頑なで聞き分けのないのはイスラエル人だけではなく、最初の間人アダム以来の罪の性質を持つ全世界のすべての民もそうなのである。アダムは神の定めたたった一つの戒めを守ることができず、罪を犯し、神にさばかれ、死すべき者となり、その子孫であるすべての人間も同様に罪の中にあり、神のさばきを受けるべき者となっている。→創世記2～3章

しかし、神を求めず王を求めたイスラエル人や全世界のすべての人間を神は決して見限ることをせず、さらにそのような状態から彼らを導いていかれるのである。それはなぜか。それは神がそのような人間でも愛し、導き、救おうとされているからである。その究極的な救いこそ、やがて来られる神の御子イエス・キリストの十字架の贖いによる救いなのである。→ヨハネ3:16, エペソ2:1～9